
消えない絆

ちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えない絆

【Nコード】

N0376B

【作者名】

ちい

【あらすじ】

小五郎と英理のお話です。小五郎はついに、英理とヨリを戻そうと頑張っています。

第1話（前書き）

まだ最後をどうするか決めていないので、どうなるか分かりませんが、こんな私に付き合ってやって下さい m——（ m

第1話

「帰って来てくれねえか。」

パチッ。

英理は目を覚ました。

・あの人の夢見るなんて、久しぶりね。

英理は苦笑した。でも、その後すぐに、悲しい顔をした。

「本当に、言ってくればいいのに…あの人…」

そして、カレンダーを見た。ハートで囲ってある日がある。

「もうすぐ、あの日だわ。」

第1話（後書き）

どうでしたか？もしよろしければ、評価して下さい。

第2話（前書き）

何か文章がめちゃくちゃに……すみませんm（――）mお許し下さい。

第2話

リンリンリン

事務所の電話がなった。

「はい、こちら妃弁護・・・」

「・・・俺だ。」

ボソツとした声が耳に届いた。しかし、英理には、誰の声かすぐに分かった。

「何か用？」

嬉しいのに、いつものように冷たくしてしまう。

「最愛の夫から電話がかかってきて、何か用？はねえだろう！」

「あら、最愛じゃなくて、最悪の間違いじゃなくて？」

そう憎まれ口を言った自分に後悔しつつも、どうして電話をかけてきたのか聞いてみる。

「それで、何かあったの？貴方から電話をかけてくるなんて、珍しいじゃない？」

「いや、用があるわけじゃねえんだけどよ・・・」

「何よ、早く言いなさい。こっちだって、暇じゃないんだから。」

「ああ！分かったよ！英理、今度の日曜用事がなかったらこっちに来ねえか？」

「いや、あのよお、ひ、久しぶりにお前の料理も食べたいかなあと
思ってた。」

ドキン。

英理の心臓が大きくなった。

「あ、貴方、何って言ったの？」

「だッ、だああらあ、久しぶりにお前の料理が食べたいから今度の日曜日こっち来ねえかつつてんだよ！」

小五郎は半ヤケになって叫んだ。言った後すぐに恥ずかしくなって、後悔したのだが…

「あ……。」

思わず言った。英理も戸惑っているようだ。

「貴方、もしかして、覚えてたの？」

「え、じゃあ、まさか、お前も……。」

電話での気まずい沈黙が流れる。やがて、小五郎が口を開いた。

「来て、くれるよな。」

「ええ。」

「じゃあ、また、日曜日にな。」

「ええ。じゃあ、また。」

第3話（前書き）

言い忘れてました！これは、コナンが新一に戻った後の話です。本当はコナンも出そうと思っていたのですが、家族水入らずな話にしようと思ってやめにしました。

第3話

今日は日曜日。蘭は朝からうきうきである。何故なら今日の夜、母親が家に来て、ご飯を作り、一緒に食べて、泊まっていっからだ。しかも、今回は自分が誘ったのではなく、父親がそうしたようなのだ。

蘭のうきうきは最高潮に達していた。

「ただいま！」

蘭は午前中園子の家に行っていたが、お昼を食べるとすぐに帰ってきた。

「お父さん！今日の夜楽しみだね」

「はあ？何がだよ？」

「何がだよ？じゃないでしょう。久しぶりにお母さんの料理食べるなあ。早くお母さん来ないかなあ？」

「別にそんなにうきうきしなくてもいいじゃないか。あいつの料理なんて、不味くて食ったら、はいちまうよ。」

「何よ、それ、だったらどうしてお母さんと呼んだのよ？」

「そうね、どうして私が呼ばれたのかしら？」

！！

「お母さん！」

「英理！」

「お母さん、早かったね！今日はいっぱい話そうね！」

「ええ、蘭。でもその前に…貴方、どうして私を呼んだのか教えてもらおうかしら？」

「あ、それ私も聞きたい。」

ここで困ったのは、もちろん小五郎である。

「え…。」

「さあ、早く言ってちょうだい、貴方。」

「お父さん！」

「え、な、何でお前何か呼んだんだろうな！こっちが聞きたいくらいだよ！」

プチッ。

何かが切れる音がした。英理は何も言わずに鞆を持ち、ドアに向かった。

「ちよっとお母さん待って！」

蘭は慌てて英理を呼ぶ。しかし、英理は一向に止まろうとしない。と、その時小五郎の声がした。

「悪かったよ。」

「え？」

英理は驚いて振り返る。

「悪かったよ。」

小五郎は繰り返した。

「さっきのは、…嘘だ。本当に久しぶりにお前の料理が食べたくなっただよ。」

「あ、貴方…」

英理は恥ずかしそうに顔を赤らめて、でも嬉しそうに顔を綻ばせて言った。

「ほ、本当？」

「あ、ああ。」

2人のぎこちないやりとり。側で見ていた蘭は嬉しくてたまらなかった。

「じゃあ、お母さん今日うち泊まっていくんだよね！早速お夕食作ろう、お母さん。」

「え？あ、蘭。そうね。じゃあ作りましょうか。」

第4話

トントントン

軽快に包丁がリズムをならす。しかし、その横では…

「痛ッ。ねえ、蘭、指切っちゃったわ。」

「もう、お母さんたら。向こうの部屋の棚に絆創膏があるから貼ってきて。」

「ええ。ごめんなさいね。」

「いいから、いいから」

蘭は笑って言った。

「えっと、ここかしら。あら？ないわね。」

英理は独り言を呟きながら、絆創膏を探した。

「ねえ、貴方、絆創膏ってどこにある？」「ああ？そこにねえか？」

「ないから聞いているのよ。」

小五郎がテレビを消して、こっちへやって来る。

「ほら、ここだよ。」

「あら、ホント。ごめんなさいね。どうもありがと。」

「ほらよ。ったく、お前は相変わらず料理下手なあ。」

小五郎が英理に絆創膏を渡しながら言った。

「失礼ね。これでも少しは上達したのよ。」

いつものようなちわ喧嘩。しかし、小五郎はふつと真顔になる。

「悪かったな、10年前の今日は。」

英理が一瞬止まる。

「な、何よ、いきなり。そんな、昔の事。」

下を向いて、英理が言った。

「それに、あれは、私が悪かったのよ。貴方は私を助けてくれたのに…、それなのに私、あんな下らない事で…。…、ごめんなさい。」

「そんな事は、もうどうでもいいんだ。ただ、俺は、どうしても、

今日、言いたかった。今日、この日に。」
2人はしばらく見つめ合った。そして、ついに小五郎が口を開いた。
「英理、俺は、…、俺は、もう、……。」「

第4話（後書き）

第3話の前書きで、コナンが新一に戻った後の話と書いたにも関わらず、この第4話を読んだ方は、何かおかしいと、違和感を感じた方もいらっしゃるかもしれません。それは…時間が立っていないさ過ぎる。コナンが新一に戻っているはずなのに、まだ1年も立っていないのです。皆さん気付かれましたか？私も気付いていたのですが、文章を上手く直せなくて…すみませんでしたー（・ー・）ーそこには、目を瞑って下さい。気付かなかった方はもう一度読んでみて下さい

後…何か、各話とも、短くてすみません←←どこで区切れればいいかわからないです…

至らない所だらけで、本当にすみませんでした。
これからよろしく願います。

第5話（前書き）

話がいつも以上にごちゃごちゃになってしまい、申し訳ないです。

第5話

「お母さん、絆創膏あった？」

台所から蘭の声が聞こえてきた。英理は慌てて返事をする。

「ええ、今行くわ。」

しかし、蘭がこっちに来る足音がした。小五郎は慌ててソファに座りテレビを着け、英理は慌てて蘭の方へ向かった。ちょうどその時、蘭が小五郎達の部屋に入ってきた。

「あ、お母さん、遅かったね。絆創膏見付からなかった？」

「え、ええ。ちょっと分からなくて探していたのよ。」

「そっか。お母さん中々来ないから、ご飯出来上がった。後は並べるだけだから、お母さんもお父さんも、もう下に来て。」

「あら、手伝えなくてごめんなさい。今行くわ。」

「いいのよ。ほら、お父さんも！」

「ん、ああ、今行くよ。」

「本当に早くね。」

蘭はそう言つと、行ってしまった。

「…今日のあの子、すごくテンション高いわね。」

「お前が来たからだよ。」

「あら、そうなの？…だったら、貴方は？貴方はテンション上げてくれないのかしら…？」

「ばッ、じよ、冗談じゃねえよ。何で、お前が来てテンションが上がるんだよ。ほ、ほら、早く行かねえと、また蘭の奴に呼ばれるぞ。」

「そ、そうね。行きましょうか。」

2人はそう言つと、笑い合ったのだった。

「おッ、今日は豪勢だなあ！」

テーブルに並べられた料理を見て、小五郎が言った。

「当たり前でしょ。お母さんと一緒に作ったんだから！」

蘭のこの発言で、小五郎が食べるのが怖くなってしまったのは、言うまでもない。

3人は食事を始めた。蘭は嬉しいせいもあって、どんどん食べる。

小五郎と英理も中々の食欲だ。残りがなくなってきたとき、小五郎が話を始めた。

「蘭、お前に言っておきたい事があるんだ。」

蘭は何だろう？という顔で父を見つめる。英理も一体何かしら？という顔である。

「何？」

「今日が何の日か知ってるか？」

この発言に英理が、はつとする。「今日？…、えっと、今日はお父さんもお母さんも誕生日じゃないし、結婚記念日でもないし、それに、初デート記念日でもないし…。わからないわ。」

「今日はな、俺達が、別居を始めた日なんだ。」

「え…？…それって、お父さんが、お母さんの事、銃で打って…それで、それで…」

英理が蘭の言葉を遮って続きを言った。

「それで、この人は私を助けてくれたのに、私が意地をはっちゃって出ていったのよ。」

「そうだ。」

小五郎はそう言って、体を蘭から英理に向ける。

「でもな、英理。もう、いいんじゃないか？俺は、もうお前の事許してる。っつーか、俺は、俺はお前に、戻ってきてほしいんだよ！」

「貴方…。」「この事を、どうしても、今日言いたかったんだ。」

小五郎はそう言つと、恥ずかしそうに下を向いた。

「戻ってきてくれねえか？もう、限界なんだよ。」

しばらくの沈黙。そして英理は言った。

「ええ。」

第5話（後書き）

多分今度で最終回です。

第6話（前書き）

最終話です。 終り方微妙です…

第6話

「じゃ、じゃあこれからお母さんと一緒に暮らせるんだね!!」

突然蘭が声を上げた。蘭がいる事をすっかり忘れていた2人はびっくりだ。2人は目を見合わせて言った。

「ま、まあ、そういう事だな。」

「そういう事に、なるかしら。」

「やったー!!」

蘭は大喜び。もちろん2人はすぐに同居を始めました。

小五郎と英理の話はこれでおしまいです。でも最後に、それからの毛利家の話を少しだけしておきましょう。

（5年後）

「蘭、麗佳の事、しつかり見ておいてね。」

「分かってるわよ。お母さん気を付けてね。」

「ええ。じゃあ行ってくるわね。」

「行つてらっしゃい。」

蘭が言つと、横で行つてらっしゃいと可愛い声がする。この子は麗佳。蘭の妹だ。蘭は今、高校の時の同級生と結婚して、幸せに暮らしている。毛利探偵事務所には住んでいないのだが、今日は2人とも、出かけて麗佳の面倒が見れないため、蘭がやって来たのだ。

「麗佳、何して遊ぼうか？」

蘭は麗佳に声をかけた。

「えっとねえ、えっとねえ、麗ちゃん、ちゅみ木ちたい!」

「積み木ね。じゃあ積み木しようか。」

「うん！」

麗佳はすごく嬉しそうだ。そんな麗佳を見て、蘭も嬉しそうに微笑む。2人は積み木を始めた。楽しそうに積み上げる麗佳。麗佳は蘭の事を時々見上げる。何か言いたそうだ。

「麗佳、どうかした？」

蘭は聞いてみた。

「あのね、あのね……」

リンリン

電話がなった。

「あ、電話だわ。ごめんね、麗佳。」

蘭は電話にでた。

「もしもし、毛利探偵事務所です。」

「あ、蘭？」

「お母さん、どうしたの？」

「実は、今日中に町内の内山さんに本を返さないといけなかったんだけど、すっかり忘れちゃって……蘭、悪いんだけど、返しに行ってくる？」

「うん、いいよ。じゃあ、返しておくね。」

「じゃあ、頼んだわよ。」

ガチャ。

「麗佳、ママに本を返しに行ってって頼まれたから、お姉ちゃんと一緒に行こうか。」

「いいよあ。麗ちゃん、行く！」

2人は外に出た。しばらく歩いていると、麗佳が蘭に言った。

「お姉たん、麗ちゃん、お姉たんと遊べて楽しい！」

「本当？お姉ちゃん嬉しいな。」

「お姉たん、今、楽しい？」

「楽しいよ。だって、麗佳と遊んでるから。」

「おうちでも、楽しい？」

「ええ、楽しいわよ。」「麗ちゃん、嬉しい！」

蘭は、心の中で思った。

楽しいよ。5年前、お母さんが家に帰って来てからはずっと、ずっと。お陰で、麗佳にも会えたから。今は、まだ知らないけど、いつか、麗佳にも話してあげよう。お父さんとお母さんの事。麗佳、驚くかなあ。

そんな事を考えていたら、1人で笑っていたらしい。

「お姉たん、何で笑ってるの？」

「え？」

蘭は自分が笑っていた事に驚いた。それから笑顔で言った。

「お姉ちゃんは、今幸せだから笑ってたのよ！」

完

第6話（後書き）

今まで読んで下さってありがとうございましたm（――）m何か最後は蘭の話になってしまいましたね…笑笑すみませんでした。

えっと、蘭の結婚相手は、高校の同級生とさせて頂きました。これは、ただ単に、私がコ哀が好きだから、新一との結婚が嫌だったから、避けただけです。新蘭が好きならすみませんでした。

それでは。これにて消えない絆は終わりです。本当にありがとうございました♪♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0376b/>

消えない絆

2011年10月3日12時39分発行